

「今日の説教、聴き手のために」 2008/6/29 明治学院教会(119)

(このプリントは毎週作っているものです) 岩井健作

「“主の祈り”を祈る」 マタイ 6:5-15

- 1、「主の祈り」(讃美歌54年版564、讃美歌21-93参照)は「福音全体の要約である」(テルトゥリアーヌス)と言われ、また形骸化しやすいことについて「最大の殉教者」(マルチン・ルター)だとも言われました。水や空気のように、それが欠乏して自覚されるような存在です。
- 2、「主の祈」の持つ意味を二つの方向で考えてみなす。
第一は、繰り返す祈ることによって身につくことです。「信仰の生活化」です。イエスは「アッバ」(ババ、あるいはお父ちゃんという幼児語)を使い、みなが崇められるように、み国がきますように、今日たべるパンを下さい、という単純な願いで祈りました。弟子たちはこの祈りを、繰り返しまねることで身につけました。まねる事の肯定的な意味を多田道太郎さんは『しくさの文化史』で説明しています。まねる事は文化の深い基盤なのです。
- 3、第二は、「天の父よ」という呼び掛けが、生活を信仰へと導きます。確かに「ほんとうには、祈れない」というつぶやきと自省はあります。その時こそ「“霊”のうめきによる執り成し」(ロマ8:26)を信じて祈ることで、祈りは奇しくも成り立っています。自己完結(自分本位)へと絶えず傾斜する生活を、破るのが「祈りの力」です。自己を閉ざす生活を、自己を開く生活へと変化させる所に「生活の信仰化」があります。しかしその祈りも常に形式化、形骸化します。これをさらに破ること、他の言葉で言えば、人間を関係存在へと再自覚させるのがうめきを伴った執り成しの恵みです。
- 4、「主の祈」の原形は、聖書ではマタイ6:9-13とルカ11:2-4です。ルカ本文のものが最古層の伝承に近いことは定説です。マタイは、この祈りを「山上の説教」の中に組み入れ「施し、祈り、断食」(6:2-8)を説いた生活綱領文の一部としました。ルカは、熱心に求めることを主題にした説話の序説的位置づけに持ってきました。マタイ10節後半の「御心が行われます(受動態の命令形)ように、天におけるように地の上にも」は、マタイにのみあります。地のことがマタイは気になります。「義」の実現は神が主体でありつつ地上の器を通して行われるのです。「赦しましたように」(マタイ)と「赦しますから」(ルカ)の違いも、マタイは地上の経験に軸足をおきます(現行使用の祈祷文は、1880年訳はルカ、日本キリスト教協議会統一訳はマタイ)。マタイの教会は、紀元80年代にユダヤ教からの迫害に耐えていました。自分達の地上の営みは、小さく拙くとも、それを他にして神の国がくるのではなくて、「私たちが、人を赦した」というあの小さな出来事に神の国の実現は宿っているのだという信仰がにじんんでいます。